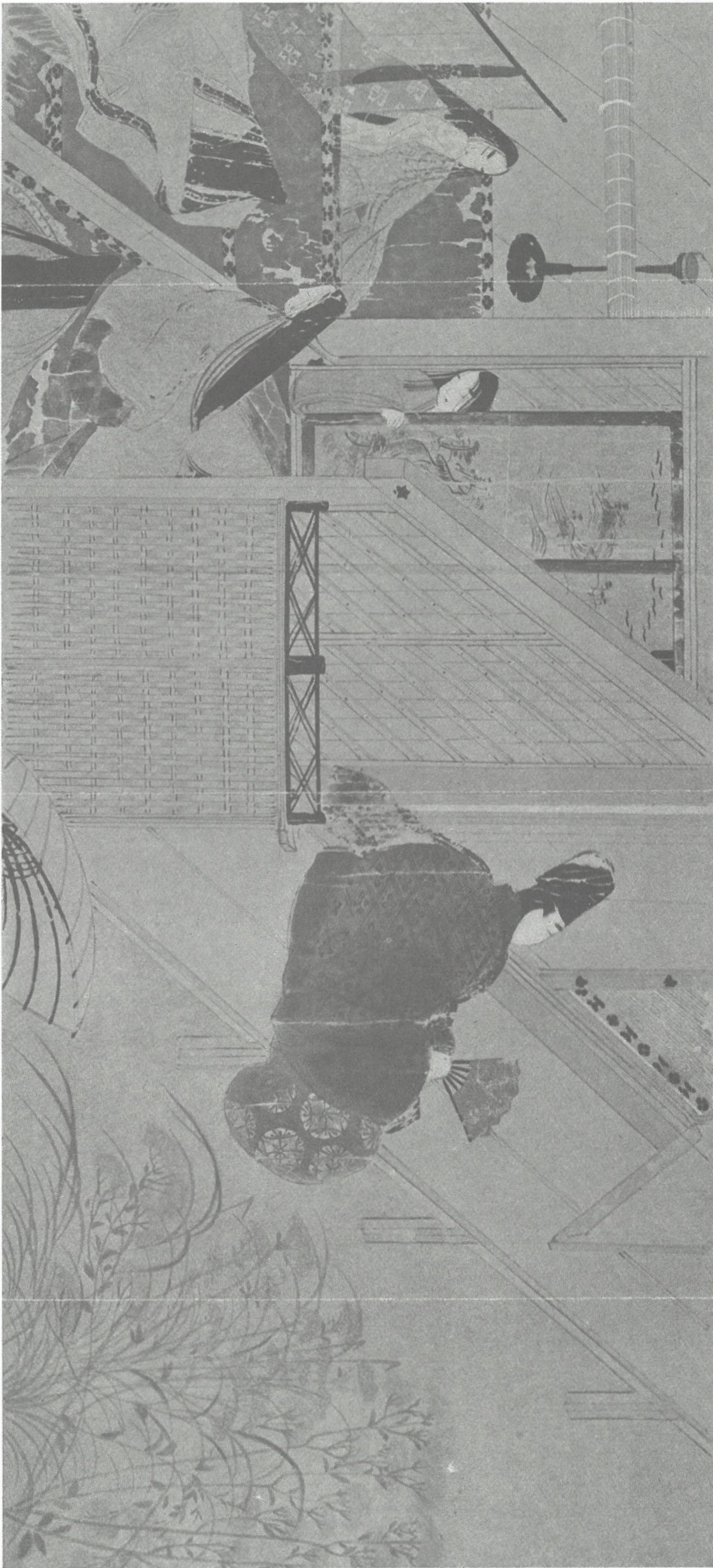


日記文学研究の基本的、かつ研究史上逸することのできない文献を集成。

日記文学研究叢書

全15巻

津本 信博 編・解説 / クレス出版 発行



津本信博

日記文学は他のジャンルに比べてその研究はやや遅い。しかし平安時代に思いを馳せれば日記に関心を持った惠慶・定家らの存在があり、とりわけ定家は『土佐』や『更級』などを書写し、また絵図の流行にも及んだ月次物語に因んで『蜻蛉』『更級』『紫』などの絵図を描かせている。だがそうはいってもやはり日記文学がそれでも実際に研究の対象になったのは江戸時代になってからである。江戸時代に入ると多くの国学者や歌人たちが現われその研究の内実ははじめは個々の作品研究が主体であつて後に徐々に日記文学研究へ移行するに至つた。

やがて日記文学研究は大正末期から昭和初期に飛躍的に深まった。そこには『古今集』や『源氏物語』の研究史の影響が基底となつている。それぞれの編者・作者の手になる『土佐日記』や『紫式部日記』にも当然注目され、歴史記録から脱却してこの時点で独自のこれらの日記研究に拍車がかつたといつても過言ではない。とりわけ明治大正期の日記文学研究は注釋的研究が主であり、やや文学として日記を扱うという点では消極的であつたといえよう。とはいへこの古典を解明する基本に原典批評という視点が注目されたことにより、文学的研究の基礎が高められたことは特筆すべきことであらう。

こうして昭和以降に本格的に文学としての日記文学が論じられることになるのである。最近プログに対する関心の高まりから長期にわたり日記ブームを招来している。若い世代に自分の内面を見つめるという行為は、古今東西人の世の変わらぬ孤独の一面を垣間見る思いがする。その意味では国際化されたとは言え、日本人の心の真髄を読む日記文学、特に古代のそれらはこれから生きる世代の精神的よりどころになるに違いない。

本叢書は明治から昭和三〇年代はじめまでに刊行されたもので、一般に入手が困難になつてきているものを対象として厳選した。これらは日記文学研究の基本的文献であることはもとより、研究史上でも逸することのできないものばかりである。

選書に当たつて覆刻のあるものは原則として対象外とし、著者や故人のご意志あるいは出版社のご意向により割愛せざるを得なかつたものもある。(早稲田大学教授)

紫式部日記講義

長田致孝著

秋のけはひのたつ云云... 第一段... 秋のけはひのたつ云云... 土御門殿の御父左大臣藤原道長公の御孫に御座りて... 池のわたりの梢ども、やり水のほざりのくさむら、おのがこゝろ、色つきわたつ、おほれたの空も、えんなるにもてはやされて、不絶の御讀經の聲々、あはれまゝりけり。やうく涼しき風のけしきにも、例のたえせぬ水のおどなん、夜もすがら聞きまかはさる。...

第二評釈篇

一四八

批評 願望を達した少女の、物語への熱中ぶりが目に見えるようである。「四一」に、「このごろの世の人は、十七八よりこそ経読み行ひもすれ」とあるように、もうそろそろその修行をすべきであるのに、あまりの無頓着を見かねての夢の警告でもあるうのに、それをも顧みずに、すっかり自分が物語中の人物になつたつもりである。作者は夕顔と浮舟、特に浮舟にあこがれておつたことは、「四一」「六七」などを見ても知られる。

二〇 五月朔日ごろ

五月朔日ごろ、つま近き花橋の、いと白く散りたるを眺めて、時ならず降る雪かとぞながめまし花たちばなのかをらざりせば

要旨 五月上旬に、軒端の橋の花びらの白く散っているのを見て歌をよんだ。語釈 五月朔日ごろ 治安元年五月上旬。作者十四歳。「朔日ごろ」は月初めの数日。「朔日」は月初めの最初の日。つま 軒端。一七段に、「梅の木、つま近くいと大きなを」とあつた。花橋の花の咲いている時の橋。橋は芸香科の小喬木で、高さ一二丈に達する。初夏の頃、白色で香気ある五弁の花を開く。実は黄色扁円形で酸味が強い。いと白く散りたる 花橋の花びらが地上に真白に散っているののである。花びらという詞が省略されている。時ならず 時節はずれに。その時でないのに。なながめまし 「まし」は事実反する

日記文学研究叢書 全15巻

第1巻 土佐日記

標註土佐日記(久留間興三編纂、明治17年、浪花書房日新館) 訂正増補 土佐日記考証(鈴木弘恭著、明治31年、東京書林) 口訳 土佐日記(佐佐木弘綱著、昭和13年、人文書院) 土佐日記(山田孝雄著、昭和18年、宝文館)

第2巻 蜻蛉日記

道綱の母(喜多義勇著、昭和18年、三省堂) 蜻蛉・紫式部・和泉式部日記(山岸徳平・村上治著、昭和31年、法文社)

第3巻 和泉式部日記

校定 和泉式部日記新釈(竹野長次著、昭和5年、精文館書店) 和泉式部日記詳解(小室由三・田中栄三郎著、昭和32年、白帝出版)

第4巻 紫式部日記

源氏物語忍草 附紫家七論(関根正直校訂、大正15年、富山房) 紫式部日記講義 全(長田致孝著、明治28年、敬文堂書店) 評釈 紫女手簡(木村架空著、明治32年、林書房)

第5巻 紫式部日記

紫式部日記講義 全(三木五百枝講述、明治32年、誠之堂書店) 新訳紫式部日記 新訳和泉式部日記 附録紫式部考(与謝野晶子著、大正5年、金尾文淵堂)

第6巻 紫式部日記

紫式部日記評釈(永野忠一著、昭和4年、健文社) 紫式部日記新釈(岡田稔著、昭和8年、正文館書店)

第7巻 紫式部日記

紫式部 まむらさきの巻(中本たか子著、昭和18年、教材社) 評註 紫式部日記全釈(阿部秋生著、昭和24年、紫乃故郷舎)

第8巻 紫式部日記

紫式部日記の新展望(益田勝美著、昭和26年、日本文学史研究会) 論叢紫式部日記(池田亀鑑ほか著、昭和27年、日本文学史研究会) 紫式部日記人物考(岩野祐吉著、昭和27年、私家版) 紫式部日記(松村博司著、昭和30年、弘文堂)

第9巻 更級日記

校註 更級日記(佐々木信綱校註、明治25年、東京堂書房) 更級日記講義(大塚彦太郎、明治32年、誠之堂書店) 口訳 更級日記(佐佐木弘綱、昭和14年、人文書院)

第10巻 更級日記

更級日記講義 全(宮田和一郎著、昭和5年、受験講座刊行会) 更級日記精講 研究と評釋(宮田和一郎著、昭和33年、学燈社)

第11巻 更級日記

口訳対照 更級日記新釈(西下経一著、昭和28年、金子書房) 更級日記(関みさを著、昭和29年、弘文堂)

第12巻 成尋母日記

成尋阿闍梨母集・参天台五台山記の研究(島津草子著、昭和34年、私家版)

第13巻 王朝三日記

王朝三日記新釈(宮田和一郎校註、昭和31年、健文社) 大倉院前の御集の研究 一いはゆる馬内侍歌日記(秋葉安太郎・鈴木知太郎・岸上慎二、昭和35年)

第14巻 十六夜日記

十六夜日記残月抄補注(小山田与清注、明治42年、國學院大學出版部) 標註十六夜日記読本(佐佐木信綱標註、明治25年、六合館書店)

第15巻 総論

自照文学史(池田亀鑑著、大正15年) 日記に就いて(和田英松著、大正15年) 日記文学と女性(久松潜一著、昭和2年) 日記紀行文学の本質(池田亀鑑著、昭和2年) 平安朝に於ける日記の研究(和田英松著、昭和6年) 王朝時代の日記文学(池田亀鑑著、昭和7年) 平安朝の日記紀行(西下経一著、昭和7年) 日記と和歌(玉井幸助著、昭和7年) 平安朝の女流日記文学(吉沢義則著、昭和9年) 日記文学と紀行文学(池田亀鑑著、昭和9年) 平安朝の日記文学(土居光知著、昭和9年) 記録 一特に平安朝の日記について(田山信郎著、昭和10年) 日記・随筆(玉井幸助著、昭和11年) 日記文学の意味(斎藤清衛著、昭和26年) 日記文学(「国文学 解釈と鑑賞」昭和29年1月) 古代の日記・紀行文学(今井卓爾著、昭和34年)

日記文学研究叢書 全15巻

津本 信博 編・解説

- | | | | |
|-----|---------|------|----------|
| 第1巻 | 土佐日記 | 第9巻 | 更級日記 一 |
| 第2巻 | 蜻蛉日記 | 第10巻 | 更級日記 二 |
| 第3巻 | 和泉式部日記 | 第11巻 | 更級日記 三 |
| 第4巻 | 紫式部日記 一 | 第12巻 | 成尋母日記 |
| 第5巻 | 紫式部日記 二 | 第13巻 | 王朝三日記 ほか |
| 第6巻 | 紫式部日記 三 | 第14巻 | 十六夜日記 |
| 第7巻 | 紫式部日記 四 | 第15巻 | 総論 |
| 第8巻 | 紫式部日記 五 | | |

A5判／上製クロス装／本文クリーム中性紙

第1回配本 第1巻～第8巻 平成18年11月刊行

ISBN4-87733-348-7(セット) 揃定価92,000円(税別)

第2回配本 第9巻～第15巻 平成19年3月刊行

ISBN978-4-87733-350-8(セット) 揃定価85,000円(税別)

物語文学研究叢書 全26巻 神野藤 昭夫 監修

揃定価225,000円 ISBN4-87733-066-6,067-4

- | | | | |
|------|-------------------------|------|----------------------------|
| 第1巻 | 竹取物語の研究 本文篇 (新井信之著) | 第13巻 | 栄華物語詳解補註 (岩野祐吉著) |
| 第2巻 | 竹取物語の研究 校異篇・解説篇 (中田剛直著) | 第14巻 | 古代小説史 (長谷川福平著) |
| 第3巻 | 新修 竹取物語 (沢瀉久孝監修、小島憲之編) | 第15巻 | 物語の様式 (森岡常夫著) |
| | 新修 竹取物語別記 (塚原鉄雄著) | 第16巻 | 物語文学 日本文学大系 (池田亀鑑著) |
| 第4巻 | 宇津保物語研究 (富沢美穂子著、関みさを補訂) | | 物語文学 日本文学教養講座 (池田亀鑑著) |
| 第5巻 | うつほ物語秘琴抄 (石川徹著) | 第17巻 | 物語文学概説 (南波浩著) |
| 第6巻 | 改訂宇津保物語俊蔭卷考注 (田中初夫著) | | 物語文学 (南波浩著) |
| 第7巻 | 狭衣物語 全訳王朝文学叢書 (吉沢義則著) | 第18巻 | 物語文学攷 平安時代 (宮田和一郎著) |
| 第8巻 | 浜松中納言物語 新註国文学叢書 (宮下清計著) | 第19巻 | 平安時代 前期 (上) 日本文学史 (西下経一郎著) |
| 第9巻 | 校註 夜半の寝覚 (藤田徳太郎・増淵恒吉編著) | 第20巻 | 日本小説史論 (藤田徳太郎著) |
| 第10巻 | 住吉物語通釈 (宮崎博道著) | 第21巻 | 王朝文学の歴史と精神 (藤田徳太郎著) |
| | 註解新訳 住吉物語 (藤井乙男・有川武彦著) | 第22巻 | 平安町文芸の精神 (窪田空穂著) |
| 第11巻 | 校註篁物語 附新校篁物語 (宮田和一郎著) | 第23巻 | 中古日本文学の研究 (堀部正二著) |
| | 校註 海人の刈藻 (宮田和一郎著) | 第24巻 | 説話文学と絵巻 (益田勝実著) |
| | 古典文学「海人の刈藻」 (宮田和一郎著) | 第25巻 | 日本文学論考 (清水泰著) |
| 第12巻 | 大鏡成立論攷 (梅原隆章著) | 第26巻 | 室町時代小説論 (野村八良著) |

源氏物語研究叢書 全17巻 日向 一雅 監修解題

揃定価175,000円 ISBN4-87733-032-1,033-X

- | | | | |
|-----|----------------------------|------|-----------------------------|
| 第1巻 | 紫式部 一人とその作品一 (島津久基著) | 第8巻 | 源氏物語の自然描写と庭園 (外山英策著) |
| | 紫式部の芸術を憶ふ 一源氏物語論攷一 (島津久基著) | 第9巻 | 源氏随攷、源氏物語今かがみ (吉沢義則著) |
| 第2巻 | 清少納言と紫式部 (梅沢和軒著) | 第10巻 | 源語釈泉、「知」の平安婦人 (吉沢義則著) |
| | 紫式部 一その生活と心理一 (神田秀夫・石川春江著) | 第11巻 | 源氏物語論究 光源氏の巻、薫の巻 (服部直人著) |
| 第3巻 | 源氏物語論集 (五十嵐力・堀部正二・池田亀鑑著) | 第12巻 | 源氏物語批評史の研究 (今井卓爾著) |
| 第4巻 | 源氏物語の新研究 (手塚昇著) | 第13巻 | 源氏物語論 (加藤順三著)、源氏物語評論 (村井順著) |
| 第5巻 | 源氏物語新考 (島津久基著) | 第14巻 | 新講源氏物語 上巻 (池田亀鑑著) |
| 第6巻 | 源氏物語 従一位麗子本之研究 (渡部栄著) | 第15巻 | 新講源氏物語 下巻 (池田亀鑑著) |
| | 源氏物語律調論 上巻 (渡部栄著) | 第16巻 | 源氏物語の語法 (北山谿太著) |
| 第7巻 | 源氏物語の精神史的研究 (関みさを著) | 第17巻 | 源氏物語の研究 (長谷川和子著) |

〒103-0001 東京都中央区日本橋小伝馬町14-5 メロ一ナ日本橋
☎03-3808-1821 ☑03-3808-1822 <http://www.kress-jp.com/>

●書店名